



平和資料館 草の家 だより

No.100

2008年9月 25 日発行



草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586
E-mail: GRH@ma1.seikyō.ne.jp <http://ha1.seikyō.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori>

「草の家だより・100号発刊」に寄せて

慰安婦を求めた男たちの文学

野田 正彰（草の家・特別顧問 関西学院大学教授）



皆さんに戦後いち早く書かれた戦争文学を、改めて紹介しよう。『肉体の門』によって風俗作家と誤解されている田村泰次郎である。1994年より「高知県昭和期小説名作集」（高知新聞社）が発刊され、そこに田村の一卷も入っている。だが田村は三重県で育った人であり、土佐人ではない。父が土佐人だということで、こじつけに入れてあり、どうもおかしいと思って無視していた。

今年春、中国山西省太原から黄土高原に入り、日本軍性暴力の被害女性の調査を行った（「世界」7～9月号に連載）。帰ってきて「田村泰次郎選集」（全5巻・日本図書センター）を開いた。そこには侵略軍から見た占領地域の実態が赤裸々に書かれている。「肉体の悪魔」「春婦伝」「檻」「青鬼」ほか（以上第2巻）、「裸女のいる隊列」「蝗」「失われた男」ほか（第4巻）を読むと、加害の男の心理が見事に書き込まれている。ぜひ被害の中国女性についての私の連載と対比して、読まれるといい。日本軍、日本兵、日本の男、そして今に受け継がれている日本の文化がよく分かるだろう。なお『洲之内徹文学集成』（月曜者）にも同じく、「棘の木の下」のような戦争文学があることを付記しておこう。

昭和16年1月、中国・華北省遼県にて 田村泰次郎

